

# 茨木市立耳原小学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和3年11月作成

## 【今年度の結果と取組みについて】

### ○●国語●○

#### (領域ごと)

- ①言葉の特徴や使い方に関する事項 概ね良好な結果であった
- ②A話すこと・聞くこと 概ね良好な結果であった
- ③B書くこと 課題が残る結果であった
- ④C読むこと 概ね良好な結果であった

#### (問題形式)

- ①選択式 概ね良好な結果であった
- ②短答式 概ね良好な結果であった
- ③記述式 概ね良好な結果であった

#### (無解答率)

概ね良好な結果であった

#### (その他)

もっとも正答率の高かった設問は、1(三)のスピーチの正しい文章を選択肢から選ぶ設問、もっとも正答率の低かった設問は2(四)の条件作文の問題、もっとも無解答率の高かった設問は、3(三)1ウの『つみ重ねる』の正しい漢字を書く設問、もっとも無解答率の低かった設問は、1(一)、1(三)、2(1)、2(2)、前半2問は正しい文章を選択する設問、後半2問は文法問題であった。

#### 分析

本校では選択問題に対しては無解答率が低く、問題をじっくり読んで取り組むことができている。しかし今回の問題では漢字の問題と条件作文の正答率に課題が見られた。

普段の校内のテストのように、出題範囲が決まっているテストではなかったことや、最終問題になっていたことから、時間が足りず取り組めなかったことが想定される。そのため、漢字の問題の無解答率が他の問題と比較して高い傾向にある。毎日の新出漢字や学年の漢字だけでなく、既習漢字も定期的に復習する必要がある、特に2字熟語を読んで、どのような意味があるのかすぐに理解できるよう、普段の授業から辞書を活用し、分からないことを自力解決できる力を育てていくよう今後も取り組んでいく。

また条件作文では、条件である語句を入れずに書き進めてしまうところが課題である。『限られた字数の中で要約する力』は今後必須になってくるので、普段の授業の中で、読む力とともに、要約する力を育てよう、授業方法の工夫に一層取り組む。

## ○●算数●○

### (領域ごと)

- ①A数と計算 概ね良好な結果であった
- ②B図形 概ね良好な結果であった
- ③C測定 概ね良好な結果であった
- ④C変化と関係 概ね良好な結果であった
- ⑤Dデータの活用 概ね良好な結果であった

### (問題形式)

- ①選択式 概ね良好な結果であった
- ②短答式 概ね良好な結果であった
- ③記述式 概ね良好な結果であった

### (無解答率)

概ね良好な結果であった

### (その他)

もっとも正答率の高かった設問は、3(1)のグラフを読み取る設問、もっとも正答率の低かった問題は、4(3)の例を参考に0.1にあたる長さについて説明する設問、もっとも無解答率の高かった設問は4(3)、もっとも無解答率の低かった設問は、1(5)の速さを求める設問、2(1)の直角三角形の求積問題、3(1)のグラフから正しい数値を読み取る設問、(2)は、同じグラフから正しい情報を読み取る設問だった。

### 分析

算数では無解答率がどの問題も非常に低く、時間内に取り組めた児童が多いことが分かる。普段の授業からペアを中心に『分からない』を大切に、何が分からないのかを聞くとともに、言葉を変えながら説明することで課題解決を行ってきた。そのため記述型の問題ではほとんどの児童が自分の考えを書くことができた。また今回はどの領域、問題形式においても全国平均の正答率を上回っていた。

記述形式の問題は以前に比べ正答率は上がってきているが、主語が抜けていたり、何を求める計算式なのかを明記できていない部分は課題である。また、図形の領域では問題にある図をそのまま読み取ってしまい、問われていることと違う解答もあった。

また今回正答率が低かった問題は、三角形の面積を求める問題と、条件に沿って長さを説明する問題であった。どちらの問題も様々な情報の中から必要な内容のみを選んで端的に答える問題であった。多数ある情報の中から必要な情報のみを選択する力をつけることは今後必要である。

## 〇●経年比較●〇

### 全体的な傾向についての分析

本校の傾向としては、以前は低位層と高位層の割合の差が大きく開いており、学力差があるように見られた。また高位層より低位層の割合が高いのも特徴だった。しかし H3 1年度より高位層と低位層の差は僅差となった。

今回の結果を踏まえて、自校では点数だけで判断するような学力ではなく、課題解決のための学び方を大切にする授業づくりを行い、意見の交流や書き方の指導を重点的に行ってきた。その結果、例年正答率が伸びなかった記述型の問題が、今年度は算数の全国平均を上回った。自分の考えを分かりやすくまとめる力がついていることがわかる。

### 学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

国語は H3 0年度以前までは、EP 層の割合が全国の割合よりも本校の割合が上回っていたが、一昨年度より全校を下回り、今年度は下回った。

しかし、低位層は全国の割合より上回り、高位層は下回った。

また算数では、H2 8年度以前から、EP 層が減少傾向にある。また低位層と高位層の差も国語と同様で差はほとんどなくなった。

## 〇●取組み●〇

### 学力向上に関する取組み

算数では基礎学力を身に付けるために、100マス計算や既習内容に合ったミニテストなどを授業はじめに行っている。特に低学年では、計算カードを用いて数の増え方を確認したり、正確に解く練習を行ったりしている。中学年、高学年ではかけ算やわり算などを使った計算を中心に行っている。

また本校ではペアや班で学ぶ時間を大切にしている。具体的には友だちの意見を聞いて自分の考えを深めることだけではなく、聞き合うことに重点を置いている。学習のめあてや課題の中で、分からないと感じているところから学習を始めることで、『なぜそうなるのか』と思考し、ペアや班で交流することで表面的な部分だけでなく、本質的な部分まで考えることができ、理解を深めることに役立っている。友だちの意見を聞くことを意識し、似ている部分や違う点などもよく聞いた上で、自身の意見を発表することに取り組んでいる。授業の中の大切な内容を自分たちで考え、整理することで、授業のふり返りでは学年に応じた文章量でまとめることができている。

これらの取組みや児童の様子を踏まえて、自分の意見を伝える力が育まれてきたことが分かる。しかし意見や考えを適切に文章で表すことに対して難しく感じる児童がいるため、今後は今迄以上に辞書や読書活動の時間を効果的に用いて、児童の書く力を育ていけるよう、一層授業方法の工夫を行っていく。